

究極の「偽」ブランド

はじめにことわっておくが、評者の研究対象は洋務運動期から日中戦争勃発に到るまでの中国の対外経済関係史であつて、日中戦争期については通り一遍の知識しかない。日中関係についても、ここ数年来取り組んできた商標権侵害紛争史と重なる部分についてだけ、一次史料を読み込んで独自の解釈をしているが、それとて一八九〇年〜満州事変直後までである。こんな中途半端な知識しかない評者に本書の書評が務まるとどうして編集部が思ったのか、首をかしげるばかりである。おもうに、それは、評者が在華外国人を利用する中国人や資本主義諸国の制度、文化、商品のニセモノを構築、製造し、これを運営販売する中国人を考察対象にしてきたためではあるまいか。大学院生時代に清末の条約社会で活躍する買辦を研究対象に選んで以来、評者は、いつかはこの問題

本野 英一



B6判 506頁
社会評論社
[2625円]

広中一成著
ニセモノ
中国傀儡政権
満洲・蒙疆・冀東・臨時・維新・南京
二〇世紀中国政権総覧 1

に言及する羽目になるだろうなと予感はしていた。だがその一方で、できればこの問題には関わりたくないという願いも抱いていた。今でも、この矛盾した思いは消え去っていないが、こんな甘えはもう許されない年齢に達してしまった。そういう覚悟を決めて、この仕事を引き受けた。

「不平等条約」体制成立から日本の敗戦まで、そして「対外開放」体制以降後、再び研究者の注目を浴びるようになったのは、在華外国人・企業に近づき、彼らの事業活動に協力する見返りに自分たちの生命、財産を保護して貰おうとする中国人の存在である。当初事情も分からぬままに彼らに利用され、翻弄されるばかりだった「帝国主義者」は、やがて彼らの行動パターンとその魂胆を見抜くと、逆に彼らを利用して中国社会経済の支配に乗り出すようになった。これに対し

て、中国側は「利権回収」「実業振興」「国貨振興」などのスローガンを掲げて国民の排外主義、民族主義感情に訴える戦術をとっていく。清末以来形を変えて繰り返されてきたこの構図の最終場面に登場したのが、来るべき対ソ戦争、太平洋の支配権を決するアメリカとの決戦に備え、戦略物資を奪い取ろうと中国侵略を始めた日本軍の占領統治に協力した一群の中国人である。

本書は、一九三〇年から四五五年にかけて関東軍が東北地方にでっち上げた「満州国」を皮切りに、占領区域を拡大する度に作り上げた「対日協力」政権を扱った概説書である。そこには太平洋戦争やその後の国共内戦、「冷戦」へとめまぐるしく転換した政治情勢を反映し、堅く封印されて、ごく最近まで権力者によって忘れることを強要されていた一群の中国人の姿が描かれている。ヨーロッパ大陸を主戦場とした「冷戦」が終わり、この時代の政局を動かしていた世代の大半が鬼籍に入った今、いよいよこの封印は解かれようとしている。それはまた、ヨーロッパ大陸において久しくタブーとされていたヴィシー政権時代のフランス社会の真相が、同政権関係者が残した文書史料の公開によって明らかにされ、「レジスタンス神話」が剥がれ始めた動きと呼応している。

本書が扱っているのは、「満州国」を皮切りに、関東軍、

日本軍の占領下に入った地域の行政と秩序維持のために組織した「蒙古聯合自治政府（蒙疆政権）」、「冀東防共自治政府（冀東政権）」、「中華民国臨時政府（華北政務委員会）」、「中華民国維新政府」「中華民国国民政府（汪兆銘政権）」である。叙述の力点は各「対日協力政権」の機構、没落過程に置かれている。本書を読んでいて特に目を惹かれたのは、同時代日本の報道機関の刊行物から丹念に拾い集められた「対日協力政権」首脳の顔写真である。これらは、中国やアメリカの研究者がまとめた類書ではなかなかお目にかかれない。巻末の略伝と併せ参照すれば、簡単な人名辞典としても利用できよう。

さて、本書を読み終えて気づいたことは、中国侵略中の日本側が決して「一枚岩」的な組織的団結を誇っていなかったことである。満州事変を起こした関東軍や陸軍と東京政府との関係、明治憲法体制の欠陥なら、高校で日本史を学び、大学で日本国憲法（公務員や教員志望者の必修科目）あるいは日本近代史の講義を受講した人なら常識であり、いままら特筆することでもない。評者が強く印象づけられたのは、そんなわかりきったことではない。日中戦争の最中でさえ、在華日本人の全てが関東軍や日本陸軍の侵略政策に協力していたわけではなかったという事実である。著者はその生き証人として、翼賛団体、新民会の職員だった岡田春生氏へのインタ

ビューを紹介し、中国占領統治地域で起きていた日本側の葛藤を明らかにしている（本書三一三～三六頁）。侵略先である中国大陸で暮らしていた日本人も、あれだけの大動乱を引き起こしておきながら、まるで意思統一がとれていなかったのである。「無責任体制」と称された東京政府の権力機構だけでなく、在華日本人勢力末端ですら意思統一がとれないでいた日本人とは一体何者だったのか。本書通読後、深く考えさせられた。

「対日協力政権」に参加した中国人は、日本側のこうした実情をどこまで気づいていたのか。本書著者は、この問題に対する説得力のある解釈を打ち出していない。眼前で繰り広げられる重慶国民党政権による要人暗殺テロや共産党による軍事的抵抗、「対日協力政権」側による報復テロの繰り返し。狂気のような状況を作り出した元凶である日本軍の占領行政の一翼を担うことが、何を意味するのか。当人たちがこのことを分かっていた筈はない。それを承知で、あえて「漢奸」の汚名を着た彼らは一体、何を考えていたのだろうか。評者はこの問題に対する納得のいく説明を下した研究に、まだ出会ったことはない。清末の買辦から「対日協力政権」指導者に到るまで、在華外国勢力に取り入る中国人の価値観、行動様式は何に由来していたのか。残念ながら本書もこの難

問の答えを見出せたようには見えない。

だとすると、読者はこの難問に対する説得力ある答えを得るために、本書をいかに活用すればよいのだろうか。ヒントとなる事実は、本書の到る処から集めることができる。まず、「対日協力政権」参加者の大半が、一八九〇～一九一〇年代の日本留学体験者だったという事実である。当時の日本はと言えば、明治憲法体制が成立し、「桂園時代」を経て「大正政変」に到るまでの戦前最も安定していた時期である。この時期の日本社会の活況と繁栄ぶり、さらに義和団事変、日露戦争で見せた厳格な規律に貫かれた日本軍の活躍ぶりは、それを目の当たりにした中国人留学生に強烈なショックを与えていた。しかも、海外留学体験のある中国人の大半がこの時期の日本を留学先に選んでおり、それにひきかえ、欧米留学経験者はごく少数であった。このことは、日中戦争勃発前夜の宋子文が語った、「中国人中、欧米留学出身者は日本留学出身者の五分の一にも当たらず」（松本重治『上海時代 中』『中公新書、一九七四年』一二七頁）であったという言葉が端的に示している。

彼らの大半が、第一次世界大戦後不況、関東大震災、世界大恐慌の打撃を受けて大きく変貌した日本の政治経済、そして政党政治家の無為無策に怒った国民や、これを受けての陸

軍の変質を把握認識できなかったとしても無理はない。中国を侵略した関東軍、日本軍は、明治大正時代の日本に尊敬と憧れを抱いていた日本留学体験者の善意を欺き、彼らを利用したのである。こんなことを書いても何を今さらと言われるだろうが、彼らの錯覚と善意を利用した日本軍出先幹部の罪業は計り知れないほど重い。

とはいえ、一旦権力の座に就き、状況を正確に認識するようになった「対日協力政権」指導者も、日本側の言いなりだったわけではない。このことは、各種「対日協力政権」の本命であった汪兆銘政権に関する英語圏、台湾の研究者による先行研究 (David P. Barrett & Lally N. Shyu eds. *Chinese Collaboration with Japan, 1932-1945* [Stanford University Press, 2001] 収録の Timothy Brook, David P. Barrett, Lo Jiu-jung [羅久蓉] 論文) が一致して指摘している。彼らは、「もはや毒を食らわば皿まで」の心境で日本側に対して様々な要求を出し、重慶国民党のテロ組織や共産党と闘い、日本側の要求に対しても条件闘争を試みている。本書は、初心者向け概説書を目指しているため、平易で分かりやすいが、「対日協力政権」内部で起きていた日本側と中国人協力者との間の対立が十分に描かれていない。この側面はもっと詳しく描かれてもよかつたと思う。

最後に、評者の脳裏に浮かんだ疑問がもう一つある。それは、一七世紀前半の満州族が「征服者」になれたのに、日本軍は遂に「侵略者」どまりで「征服者」になりそびれたのはなぜだったのかという問題である。犠牲者の正確な数こそ不明だが、どちらも非戦闘員大虐殺を行っているから、蛮行の規模では説明がつかない。日本側が用意した統治イデオロギー(「五族共和」「八紘一宇」)の説得力が孫文の「三民主義」に遠く及ばなかったからだという解釈も当てはまるまい。もしそうならば、内戦期に国民党が民心を失った事実を説明できない。同様に、毛沢東思想が中国民衆の多くを引きつけたからだとも言えない。また、「対日協力政権」統治区域の民衆の生活が、重慶国民党政権統治区域、共産党統治区域のそれより格段に劣っていたからでもなさそうである。

となると、やはりその最終的原因は、日清戦争敗北直後当たりから深く静かに進行していた、中国社会内部での何らかの変化によって説明するしかないと思う。そしてこの変化は、人民共和国成立後どうなったのか。漠然とした印象めくが、このように考えると、二〇世紀中国社会の変化を新たな視点の上に立って研究することが可能になる。本書は、こうした新しい発想への踏み台として読まれるべきだと思う。

(もとの・えいいち 早稲田大学)